

奥多摩の自然



奥多摩

《第10号》

平成20年7月15日
奥多摩観光協会

～季節だより～

待望の夏休み。セラピー度満点の奥多摩へお出かけください。私たちが、もっともリラックスできるのは緑に代表される自然の中に身を置くときです。

人類の祖先がオギヤと生まれた時、初めて見た色は緑だったといわれています。そのため、緑色は目にやさしく感じ、心癒されるのだそうです。人類の歴史、500万年の中で限りなく100%近くが野山の緑に囲まれた生活だったので、現代人が緑に心惹かれるのは当然のことです。

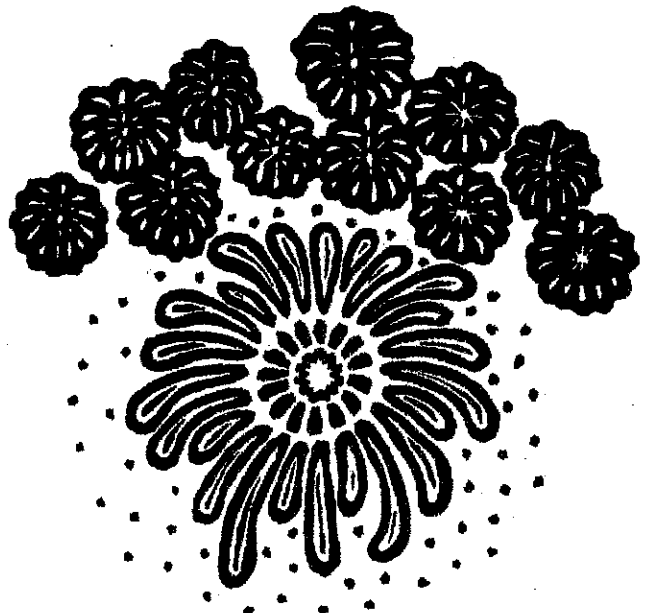
現代人は、テレビやパソコンを見続けて目を酷使し、ヘッドホンで耳に直接音を取り込んでいます。そのため、遠くのものを見たり、遠くの音を聞く機会が少なくなりました。そういう意味では、野鳥観察をはじめ、山の上で見る青い空や白い雲、夜の星座観察などは、五感蘇生のためにはまたとない絶好のチャンスです。

見るという字を分解すると、目の下に片膝ついた足をイメージしています。今年の夏は、心機一転し、余裕をもってじっくり見たり、観察する気持ちで楽しんでみてください。

「鳥の声に耳を傾け、足を運び、近づいてじっくりと見る。」奥多摩は、こんな方程式通りのことが簡単にかなう所です。オオルリやコマドリの美しい声を聞き、さらに虫の鳴き声のようなヤブサメの声を聞くことができれば楽しさ倍増です。

一方、夏だからこそ暑さを避けて夜の奥多摩を体験してみるのも一興です。標高2000mを超える雲取山で見る満天の星。これに勝るものはありません。気軽さでは8月9日(土)の花火大会がお勧め。花火は見るものとはいえ、ここ奥多摩では、炸裂音が山々にこだまして花火を耳で楽しむことができます。見て聞いて感じて山里のおいしい料理を食べる。ストレス社会の中でたまには、非日常的な過ごし方も必要なのではないでしょうか。

(岡崎 学)



【愛宕山頂からの花火】

木版画：安藤修二

～来さっせえ～

越沢溪谷の巨樹を訪ねる

行先：古里～鳩ノ巣
開催日：9月10日(水)

奥多摩は巨樹の町として有名ですが、今回は古里附(こりつき)のイヌクス・越沢(こいざわ)のトチノキを訪ねます。

古里附のイヌクスは青梅街道沿いにあります。樹齢推定300年以上、幹周り約6.5mの巨木です。地名の「古里」は書物から引用すると、昔この辺りが御嶽神社の参道口であり、近くの不動滝で身を清める「垢離(こり)取りの場」だったとか。

多摩川では、大正のころまで奥多摩方面から木材を川で搬出し、流れ着いた木材を筏に組む土場がありました。このイヌクスは江戸のむかしから立ち続け人々を見守ってきたのでしょう。

次は、越沢のトチノキを訪ねます。多摩川に架かる「寸庭橋」を渡り、松ノ木尾根を登ると東屋があります。ここは眼下に鳩ノ巣駅方面と素晴らしい景色が望めます。

この先が越沢バットレスキャンプ場。多摩川の支流

の越沢沿いにあります。鳩ノ巣から大橋峠へ歩いても見落としかちな場所です。そこには、テーンとロッククライミングの練習場所の大岩壁があり、垂直に迫ってきます。その迫力たるや圧倒されます。キャンプ場のなかを抜け、その奥200mほど進むと行き止まる所があります。この地点ではトチノキは見えません。

どのくらい上り詰めたか…ありました！どでかい巨樹が。幹は苔むし、空に向かって両手を差し出しているようでした。あまりの大きさに圧倒され、口をポカンと開け見上げてしまいました。感動また感動でした。同行した仲間と思わずカメラを向けましたが、全体が入りきれません。その根元に座り記念写真を撮りました。なんと人間の小さいことか、何人で幹を抱えることができるでしょうか。周囲は木立ちに囲まれうっそうとし、大自然のなかで伸び伸びと育ってきたのでしょう。

この巨樹に遭遇すると、人間がなんとちっぽけに見えます。人間は寿命が延びたとはいえ何百年も生きられません。この感動をあじわってほしいと思います。

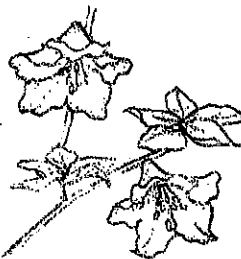
是非「来さっせえ！」 (武田和代)

～行って来たあふ～

御嶽奥の院にシロヤシオを訪ねる

当奥多摩観光協会主催によるシロヤシオを訪ねる企画は、これまで川苔山や蕎麦粒山において10年近く実施してきた。近くでこのツツジを見たいという希望に応え、本年、標記のコースを新設した。以下は、本コースの設定経過と実地踏査並びに本番第1回の報告である。

昨年の秋、奥多摩ガイドの会事務局より、新企画の素案提出についての呼びかけがあり、各自日頃から温めていた企画や自信のあるコースについて文書で提出した。12月の全体会で提案者の趣旨説明。その後1月末まで専門部会であるイベントプロジェクト会議で検討を重ね、再度全体会の了承を得て新企画として決定した。さらに共通認識を得るため、4月のガイド研



修でこのコースを全員で実地踏査、5月2日には直前の再踏査も実施した。

5月7日の本番では、当選者38名中33名の一般参加があり、ガイド6名がサポートした。当日はJR御嶽駅前を臨時バスで出発、この春新型車両となったばかりのケーブルカーには団体乗車、4個班に分かれて午前9時に登山を開始した。

お目当てである愛子様お印のシロヤシオ(五葉ツツジ)は、昼食をとった奥の院付近で丁度満開。堀越チーフガイドの説明に耳を傾けながら、鍋割山から大橋峠を経てJR鳩ノ巣駅に14時到着。ストレッチを済ませて解散。お客様の笑顔に主催者もほっとした。

(富士光男)

注記：本コース中、鍋割山～大橋峠間は標識も無く登山道も未整備である。したがって経験者の同行による入山とされたい。

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その8 ～

「よく頑張った。感動した！」

まだ梅雨前だというのに、カラッとした五月晴れが続かない。例年の奥多摩なら、風薫る季節の新緑を求めて、登山者がドッと押し寄せるのだが、今年の4月、5月は雨の日が多く、登山者の出足が鈍っている。気象庁は「4、5月の計61日のうち、東京では6割以上にあたる37日で降雨を観測するなど、記録的に雨が多かった」と発表した。原因は「季節はずれの台風の相次ぐ接近。南米ペルー沖で海水温が下がる『ラニーニャ現象』が影響した」と分析していた。

それでも奥多摩の山は、日に日に緑を濃くし、このまま梅雨に入るのだろう。

5月18日、行方不明になっていた男性、Kさん(63歳)の遺体が海沢谷で発見された。

Kさんは1月13日「奥多摩の山に行く」と都内S区の自宅を出たきり、夜になっても戻らなかった。翌日奥さんから捜索願が出て、山岳救助隊で10日以上捜索した。「奥多摩の山」という漠然とした情報の中、持って出た携帯電話の位置測定で、日原街道の大沢集落に立っているアンテナが、Kさんの持つ携帯電話の微弱電波を拾っていることと、Kさんが春になったら登る山の予定表に、そのアンテナの北側正面に位置する、蕎麦粒山があったことで、下山路に当たる鳥屋戸尾根に照準を絞り、警視庁航空隊のヘリコプターなども投入して6日間捜索したが何の手掛かりもなく、「情報待ち」として一旦大掛かりな捜索は打ち切られた。

それから、度々山岳救助隊を訪れて、その後の情報を聞きに来るKさんの奥さんが何とも気の毒で、「何とか探してやろう」と若い隊員が中心となって探し続けてきた。

5月16日、私は週休であったが、当日週休の若手隊員が探しに行くというので、私も付き合うことにした。私以下5名で鳥屋戸尾根東側の岩壁帯を探し、西側に派生する支尾根を下った。支尾根の急斜面に引っ掛かっていた、紺色のTシャツを発見し回収したが、他には何も発見できなかった。

こんなに集中的に鳥屋戸尾根を捜索してきたが発見できない。携帯電話位置測定を度外視して根本的に捜索方針を練り直す必要があるのかもしれない。

5月18日午前中、Kさんの奥さんが山岳救助隊を訪ねてきた。2日前の捜索で見つけて持ち帰

った、紺色のTシャツを見てもらった。しかしKさんの持ち物ではなかった。奥さんには携帯の位置測定に固執しないで、もう少し広範囲にしてポイントを絞り、人が出せるときには探してみる旨を伝えた。

Kさんの奥さんが帰ってから3時間後である。「海沢谷に沈んでいる遺体がある」と釣り人から110番通報があり、森山岳救助隊長以下8名が緊急出動した。「まさかKさんでは」という考えも頭をかすめたが、大沢集落のアンテナと海沢谷では全く逆の方向である。距離も多摩川を挟んで10キロほど離れている。

現場は海沢谷林道を三ツ釜ノ滝方向に入り、井戸沢出合いから100メートルほど下流であった。遺体は水深約1メートルの、淵になった川の中央部に沈んでいた。革の登山靴を履いて、衣服には青白い水苔が付き、仰向けで右足は砂の中に埋もれていた。相当に古い遺体だと分かる。スバリ(鉗状になったカギ)を打ち込み衣服に引っ掛け、遺体を浅瀬に寄せた。左腕には女性用の丸型腕時計をはめ、ジャンパーのポケットには古い型の携帯電話が入っていた。人相は判らないが口には部分入れ歯が見えた。Kさんだろうか。刑事課員の実況見分が終了し、遺体を納袋に入れ、バスケット担架に固定する。みんなで沢の中を林道下まで搬送し、海沢谷右岸20メートルほどの急斜面を、山岳救助車のワイヤーウインチで引き上げ、林道上の車に収容し刑事課員に引き継いだ。

交番に戻り、すぐKさんの奥さんに電話を入れた。すでに奥さんは帰宅していた。あまり期待を持たせないようにしながら何点か質問をした。「Kさんはどんな腕時計をして行きましたか?」「娘の時計をしていきました。革のバンドです。」「携帯電話はどんな型でした?」「古い型の、折れないものです。」「入れ歯はありましたか?」「総入れ歯ではありませんが、部分的に入れてあります。ほぼ合致している。」「見つかったんですか?」と逸る奥さんに、「予想している場所と全く違う所から、古い遺体が上がりました。まだハッキリしませんので、ケータイのメーカー、型式。通っていた歯医者の名前と住所が分かりましたら電話ください」と言って、一旦電話を切った。

退庁時間になっても、Kさんの奥さんから電話は来なかった。こちらから何度掛けても、呼び出し音は鳴るが出ることはなかった。取る物も取らず電車に飛び乗って、青梅警察署に向かっているのではないだろうか。

翌日、遺体は歯形によりKさんであることが確認された。Kさんの奥さんはどんな心境であったろう。何度も山岳救助隊を訪れて、早く見つけて欲しいと願っていたが、4ヶ月もたってしまった今「元気な姿で」とは考えていなかったと思う。しかし遺体となって帰ってきたKさんに直面し、遭難死が現実になってしまった悲しみと、「見つかってよかった」と思う気持ちが、心の中で複雑に交差していることだろう。

それにしても携帯電話による位置測定は、今までの例からいっても、奥多摩においてはまったく当てにならない。私は詳しいことは分からないが、電波が山などの障害物によって跳ね返るなどの現象があるからなのだろうか。

Kさんは何で海沢谷などにいたのだろうか。奥さんの話では滝を見るのも好きだったという。海沢谷は美瀑の宝庫でもある。三ツ釜ノ滝、ネジレノ滝、海沢大滝は都指定の名勝であるし、その外にも海沢谷林道から直接対岸に見える井戸沢出合いの滝は、高さ6メートルほどの美しい直瀑である。その滝を見に谷へ下りる際、過って谷に転落したものであろうか。そしてその下流の、釣り人もあまり足を踏み入れない瀑流帯で、ひっそりと4ヶ月ものあいだ人目に晒さないでいたものだろう。

Kさんの捜索には長い期間がかかり、残念な結果に終わってしまったが、何とか奥さんの元に帰すことができた。この捜索で私には、もうひとつ大きな収穫があった。それは、若い隊員たちが、自分の休みを利用してまで自主的に捜索したということである。山岳救助隊員としてのプライドが育ちつつあることを実感した。

長年山岳救助隊の仕事に携わっていれば、今回のように残念な事も、悔しい事も多くある。苦しい時も、辛い時もある。そんな中でも楽しかった事、嬉しかった事もそれ以上にあったことも確かである。

今年の春先、1枚の葉書が山岳救助隊の私宛に届いた。それは今から6年ほど前、真名井沢で救助した大学生からのものであった。

6年前の夏、真名井沢に沢登りに来た〇〇大学ワングル部員の男性1名が、真名井沢上部で転落したと救助要請が入り、警察と消防の山岳救助隊が出動した。現場に駆けつけたところ、沢の詰め
の岩場で、約40メートル転落した男子学生Kくん(当時21歳)が、傷だらけで倒れていた。意識は全くなく、身体は痙攣し、耳の穴から血が流れ出ていた。緊急を要する事態だった。消防と協力してバスケット担架に乗せて、真名井北稜まで

引き上げ、さらに赤杭尾根まで搬送した。尾根の防火帯からヘリに吊り上げて病院に収容したのだが、Kくんは意識不明のまま、頭蓋骨骨折、脳挫傷、脳内出血、硬膜外出血などで緊急手術を受けたという。

それから2ヶ月ほどして、〇〇大学ワングル部のリーダーから山岳救助隊に電話があり、Kくんは早期に病院に運ぶことができたことと、優秀な医師のおかげで一命を取り止め、その後も驚異的な回復力で記憶も戻り、今では会話も出来るようになったとの報告だった。

この吉報に、救助に当たった隊員はみんなが驚いた。誰もが「ダメかな」と思っていただけに、「やったぜ!」との喜びがこみ上げてきた。

1年後、快復したKくんは母親に伴われ山岳救助隊にお礼に訪れた。まだ半身に障害が残っているというが、大学の復学も果たしたという。みんなKくんの頑張りを称え、エールを送った事を覚えている。

葉書には「拝啓、突然のお便り失礼いたします。2002年に真名井沢に転落し、金様はじめ山岳救助隊の皆様にご助けいただきました、当時〇〇大学3年のKです。ご無沙汰いたしておりました。事故以来、7ヶ月の入院を経て復学し、その後大学院に進みました」とあり、昨年の秋から進めていた就職活動が実を結び、大手電機メーカーに採用され、4月1日から勤務する運びとなった。まだ体幹機能や左半身に、軽い障害は遺っているが、これからも頑張る。と書いてあった。そして「助けて頂き、有り難うございました。誠に感謝しております。救助隊の皆様によろしくお伝えください」と結んでいた。

救助したひとつの命が、こんなにも喜びとなってまた私たちの所に返ってくる。「山岳救助隊冥利に尽きる」といえる。

数年前大相撲で、足をケガした横綱貴乃花が優勝決定戦に臨み、誰もが横綱武蔵丸の優勝を確信したが、渾身の力で武蔵丸を投げ飛ばし、土俵上に阿形相で仁王立ちとなった。当時の小泉首相が、内閣総理大臣杯を授与する際、土俵に上がり「痛みを耐えて、よく頑張った。感動したっ!」と絶叫したことがあった。

私はKくんの葉書にそんな感動をおぼえた。そして、私が昨年出版した「山岳救助隊日誌」に、Kくんの救助のことも詳しく書いてあるので、表紙の裏に「Kくんよく頑張った。就職おめでとう」と書いてお祝いに送ってやった。

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(10)

白丸は、JR青梅線終点奥多摩駅の1駅手前にある白丸駅の上方に、坂状に広がる地籍です。白丸は、江戸時代から明治のはじめ頃までは、武州多摩郡白丸村と称する独立した村でした。白丸と東隣の棚沢との境に城山(じょうやま 759.8m)があります。

この山は、むかしは城山(しろやま)といていたようですが、江戸時代に代官所の役人が廻村中、「城があったといっても確かなことではないので、仮名でジョウ山と書くように」と指示し、それ以後、ジョウ山になったといわれ、白丸も元は城丸と書いていたような話があったといわれていますが、不確かな話です。

むしろ白丸とは、この地域の地形が語源になっているようです。三方を山に囲まれた中に、丸い形の畑地があり、畑地を家が囲んでいます。焼畑のことを刈代(かりしろ、かっしろ)というように、代(しろ)は畑のことを表す言葉で、代(畑)を丸く囲んでいる集落の様子から代丸(しろまる)と呼ばれるようになり、時代を経て白丸に変わっていったのだといえます。

白丸には、「丸の内」という小字があり、この丸の内を囲んで、東が「東山」、西は「西山」と「杣入」北は「戌亥頭(いぬいがしら)」、南は「むかい東」と「むかい」で、丸の内を中心にして大方が方位で表されています。丸の内とは、まさに白丸の中心という言い方がぴったりです。

「戌亥頭」は北西の頭(上)、「むかい」は向こうの意、「杣入」は、武蔵名勝図会によると「数馬山の麓の谷間ゆえスマ入り」としていたが、村人が誤り伝えてソマリ入りというようになった。」といえます。杣入の中を流れるイホリ沢が多摩川に流れ落ちるあたりに、巨岩が川の中へ突き出ている、岩の上には、1.5㎡ぐらいのカマ(釜)があり、いつも清泉を湛えていて、ナギ尻のカマと呼ばれていました。年によって旱(ひでり)があると村中総出で、このカマを掃除して雨乞いのお祈りをするると必ず雨が降ったといえます。このナギ尻のカマも、今は白丸湖(ダム)に没しているため、見ることは出来ません。

(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

山の花だより

センニンソウ

梅雨が明けると、奥多摩が最も賑わう季節になります。

8月のお盆過ぎ、朝夕に涼風が感じられる頃、林道沿いで、白いセンニンソウの花が咲き出します。

その時にだけ人目につきますが、あまり名前は知られていません。白い十字の小花がひとつひとつは小さいのですが、群れて咲くので満開のときなどその一帯が真っ白に見えます。

この花を初めて意識したのは、いつの頃だったでしょう。自宅近くの玉川上水の堀を埋めつくし、白いレースのカーテンのように広がっていました。たくさんの雄シベが清楚でとても華やか。

図鑑によるとキンポウゲ科センニンソウ属。花が終わると雌シベは3cmほど伸びて羽毛状になり、それを仙人のヒゲにたとえたとか。

有毒植物で根は漢方の威靈仙と呼ばれ、利尿、鎮痛剤となります。つる性半低木で茎はよく分岐して広がり、曲がりくねった葉柄でからみついて伸びてゆきます。白い花弁のように見えるのは萼片です。

同じ白い花で葉に荒い鋸歯があるものがボタンヅルです。

同じ方法で風の力を利用して遠くまで種を飛ばして子孫を増やす仲間にタンポポ、キジョラン、イケマなどがあります。



日本の植物学の父といわれる牧野富太郎は自叙伝で「人間は植物がなくては生活できないので、植物に向こうでオジギせねばならぬ

立場にある。植物を愛好することで慈愛に富んだ人間が育っていく。」とあります。

さあ暑さに負けないで慈愛に満ちた感謝の心を持って夏の花に会いにでかけましょう。

(安藤基子)



ガイドだより

～私の一名山～ 大岳山

青梅線沿線に住んでいるせいか、東京の奥座敷である奥多摩には、何かとお世話になっている。日帰りで楽しむには恰好の大人の遊び場であり、春から夏にかけては、山菜採り、溪流釣り、秋にはキノコ採りなど、フィールドクッキングにはこと欠かない大自然がある。

奥多摩の山々で、大岳山(1267m)、御前山(1405m)、三頭山(1531m)を奥多摩三山と呼び、その中で一番低い山でありながら、ひときわ大きくそびえ立っている山が大岳山である。その山容は、奥の院、鍋割山、日の出山などを配下に従え、まさに奥多摩の王者の雰囲気を感じ出している。

江戸時代、日本各地からの交易船は、あの独特の山頂を目印に江戸湾に入港したそうだが、さもなりなんと1人納得している。

私が、大岳山に初めて登ったのは、30数年前、溪流釣りに夢中になっていたころだった。その日も、早朝より海沢大滝の上流狙いで遊行を続けたが、休日ということも手伝って、先行者あり、沢やさんあり、で釣果はさっぱり、晩酌のおかずにもならなかった。

空魚籠を下げての帰路は、仕事道らしい踏み跡をたどり、藪こぎをしながら溪の上流部へ向かうこと1時間強、突然、登山道へ飛び出した。

左大岳山への標識につられ、頂上に立ったのは昼頃であったと記憶している。腰にナタ、魚籠、釣り竿、地下足袋姿の私に、周りの登山客のあきれかえった顔が、今も目に浮かぶ。その後、藪こぎの道は海沢探勝路であると判明した。

奥多摩には、雲取山を筆頭に、鷹ノ巣山、七ツ石山、六ツ石山など、すばらしい山がたくさんあるが、都心の高層ビルから見える山、青梅線の車窓から真っ先に目に入る山が大岳山であり、私の大好きな山である。そんな大岳山を、ある時は、友人のように親しく感じ、ある時は、まるで神様を崇めまつるかのように畏敬の目で眺めつつ、奥多摩の盟主として、いつまでも君臨していて欲しいと願っている。

(平塚賢次)

追記：奥多摩三山の由来

昭和31年(1956)頃、奥多摩山岳会の会員であつた秋山平三氏が命名したと聞いております。

施設案内

☆ 釣堀 CAFE 『二見』 FUTAMI (海沢)

元の海沢釣堀で、氷川発電所近くにあります。釣だけでなく、魚のみそ焼き・石釜でのピザの体験や、工夫を凝らしたお土産などを楽しめます。

- * 入場料 お一人様 300円
 コーヒーサービス(おかわり自由)
- * 毎週水曜日定休日

お申し込み・お問い合わせ 0428-84-2833
奥多摩町海沢 781番地

イベント案内

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 7月29日(火) トリ・ムシ・浮橋を楽しむ
 応募締切日 7月15日(ハイキング)
- ② 8月5日(火) 丹三郎からレンゲシヨウマ
 応募締切日 7月18日(登山)
- ③ 8月15日(金)、18日(月)
 チビッコ探検隊 カジカ探し
 応募締切日 8月3日(ハイキング)
- ④ 8月29日(金) 大多摩ウォーキングトレイル
 応募締切日 8月15日(ハイキング)
- ⑤ 9月10日(水) 越沢溪谷の巨樹を訪ねる
 応募締切日 8月20日(ハイキング)
- ⑥ 9月14日(日) 小河内神社の鹿島踊りを見る
 応募締切日 8月20日(ハイキング)
- ⑦ 9月25日(木) 白丸散策と川合玉堂の足跡
 応募締切日 9月10日(ハイキング)

* 募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成20年10月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会